私が政治を目指した理由

●組●●番●●●●

8 月 3 日、谷本誠一氏の事務所でインタビュー

プロフィール

- 昭和31年5月5日、江田島に生まれる。
- 昭和50年、呉三津田高校卒業。
- 同年、プロ棋士養成機関(社)日本将棋連盟直属の「奨励会」に在籍。
- 昭和62年、東京で中川秀直代議士の秘書、国会議員会館で活動。
- 平成7年、呉市議会議員選挙に初出馬当選。
- 平成21年度、和庄中学校PTA会長。
- 平成22年度、呉市監査委員に就任。
- 平成31年、呉市議会議員選挙で6選を果たす。
- 令和5年4月、呉市議会議員選挙に次々点で惜敗。

1.はじめに

僕は将来就きたい職業が定まっているわけではない。ただ漠然と政治や法律に関係する仕事をしたいと考えているくらいである。だがどんな仕事をするのかあまりにも知らなさすぎるので、実際に政治、法律関係の仕事をしている人に話を聞こうと思った。
僕と谷本氏の繋がりは、僕が小学校時代に谷本氏が幹事を務める将棋の学生会に通っていたことだ。ちょうどインタビュー企画と統一地方選の時期が被っていたため、この度インタビューをさせていただくことになった。

2.将棋との出会い

昭和31年、江田島市で生まれた谷本氏は、小学4年生の時に近所で流行っていた将棋に興味を持ち、指し始めた。ただ、ルールはめちゃくちゃだったそうだ。
「相手の駒を取った時にそれがまた使えるということを知らずにやってました(笑)」
中学1年生の時、転校生に詰まされたことをきっかけに将棋にどんどんハマっていく。
「将棋のルールを勉強しないといけないと思った。だけども教えてくれる人がいないのよ。それでどうしたかというと、家に小学館の百科事典があって。それで将棋を覚えた。つまり私の師匠は百科事典なんです」
そこで初めて取った駒を使えると知り、将棋は非常に奥が深いゲームだと思い、感動のあまり涙を流したという。
「将棋は本物のゲームだと思った。これは極めんにゃいかんと」
そして将棋の本を買い込み、中学では敵なしになった。
その後三津田高校(呉の進学校)に入学した。だが、高校ではあまり将棋を指す人がいなかった。だから、高1高2の教室を全て回り、発起人を集めて将棋部を創った。顧問は高3の担任になる化学の先生だった。その後、奨励会に入ろうと思うようになった。大学に進学する気はなかったので、高校3年生の間も部活に在籍し続けた。プロになるためには早く奨励会に入らなければならないので、高校を中退しようと思っていたが、進路選択の三者面談で担任に説得されたという。
奨励会…将棋のプロを目指す人が通うところ。
「親は私が言ったことに対して絶対に何も言えないの。私は言い出したら聞かないタイプだから。だけどその時に先生に(お前は将棋に行くと言って勉強から逃げているんだ)と言わ

れたの。私も当時学校の勉強が面白くなかったから、その言葉はグサっときたわけよ。あと先生が(高校卒と高校中退では将来就職する時に雲泥の差がある)と。私は早く将棋の方に行きたかったからそんなのどうでも良かったけど、それよりも途中で逃げていると言われるのが嫌だったからそこで中退は踏みとどまったという感じ」
ちなみに、当時プロになるには中学3年生までに奨励会に入らないと厳しいと言われていた。今は小学6年生。

3.奨励会時代

(1)入門

高校中退を踏み止まった谷本氏は、授業が終わって自由登校になった2月2日に大阪にある高島一岐代八段の道場に突撃した。(アポなし)その後、呉には戻らず、卒業式では母親が代理で卒業証書を受け取ったという。そして入門し、8ヶ月後の奨励会の入会試験に向けて修行することになる。入門当時、谷本氏はアマチュア二段だったそうだが、奨励会に入るためには、アマチュア四段〓プロ六級の実力が必要とされるそうだ。
「もう帰らんつもりで大阪に行っとるから、私が高島道場で入門試験を受けてる間に母親が近くのアパートを契約しとったわ。どんな契約か後から見せてもらったら**3**畳**1**間。で師匠の道場からは歩いて**30**秒のところ」
兄弟子は、試験対局の相手だった東和男八段や4歳年下の脇謙二九段。
弟弟子は高校の卒業式に出た後下関から来た人で、共同生活する相手になる。

(2)極限の共同生活

谷本氏は、弟弟子と3畳1間、家賃7200円のアパートで共同生活していた。当時近くに市場があり、そこに買いに行くのが弟弟子の役割。谷本氏は調理担当だった。
「困ったのは夏場だったね。とにかく腐る。冷蔵庫がないから。なんだけど相方はまとめて買ってくるから、腐ったところを切り落として鍋に入れて。みそ汁とかカレーとかしてたね。とにかく火を通さんにゃいけんから」
野菜とかはどこに置いてたんですか？（戸田）
「部屋に半畳くらいの押し入れがあって、下段には布団を押し込んで、上段に野菜とか鍋とかを置いていたかな」
キッチンはどうしてましたか？共同だったり？

「いや、**3**畳の部屋の中に小さな流し台みたいなのがあって、そこにコンロとか鍋とかまな板を置いて調理してたね。まあ要するに洗面台だよね（笑）ご飯は炊飯器があったから大丈夫だったけど。そんな夏の料理よりもっと大変なのがあって」
まだあるんですか？（笑）
「まだまだあるよ。数え切れんぐらい（笑）。一番辛かったのは洗濯やね。洗濯機ないもん。アパートの**2**階に共同の水洗い場があって。そこで洗濯板でしてた」
え、洗濯板で？
「洗濯板で。だから冬がきつい。お湯が出ないから。ベランダにも屋根がなかったし。だから**2**週間洗濯物を溜めて、一旦決意して上に上がったら**2**時間はかかったね。ところが、近くにコインランドリーがあって。何回も前を通ってたんだけど、ゲームセンターだと思ってたから近づくこともなく（笑）。結局わかったのは将棋の修行後だったね（笑）」

(3)道場で

奨励会に入った後も、毎日のように道場に修行に行っていた谷本氏や弟子の方々。道場に来るアマチュアの方に教えていたこともあったが、修行ということで給料は出なかった。アルバイトも禁止だったという。
「たまに師匠が稽古をつけてくれることがあって。ただ、教えてくれたのは昔の古い将棋ばかりで、それを間に受けて奨励会でやってみると散々な目にあって(笑)」
それは将棋が進化していってるから？
「そう。将棋は絶えず進化していきますから。なのにそれで月謝を取られて。こっちはタダ働きしてんのに(笑)。これを他の奨励会の人に話したら(地獄みたいじゃねえ。うちは月謝貰えるよ)って言われて」
やっぱり師匠によってやり方は様々なんですね(笑)。
「いや、様々というよりか、こんなことをしているのはうちの師匠だけじゃったね。この前も畠山鎮八段を将棋のイベントに呼んだら(知ってますよ！**地獄の高島門下**ですよね！)って言われたよ(笑)」
噂になるぐらいですか…
「アルバイトも禁止だったしね。まあそれは当然で、何のために将棋しに来てるんだって話になるから。全て将棋三昧にしろと。人生賭けろと。だから祖父が亡くなった時も葬式出られんかったもん。親の死に目にも会えんのがプロ棋士だと。それぐらいの覚悟を持って修行しなきゃダメだという」
思っていたよりもだいぶ厳しい…
「でもそれが当たり前だと思ってたからね」
というかタダ働きでアルバイトも禁止ってどうやって生計を立ててたんですか？

「それはもう親からの仕送りよね。大体4万円ぐらい送ってもらってて、家賃、光熱費、食費とかを引いても結構余ってたのよ。遊びもせんかったし。それで他の奨励会の人が貸してくれと言うんで貸したらいつのまにか戻ってこんかったり(笑)」

(4)奨励会

奨励会は、月に2日例会日があり、1日3対局。ひと月に6局しか指せないため、奨励会員はみんな死に物狂いで指していたという。谷本氏は2年8ヶ月在籍した。
「関西将棋会館っていう古い会場があって、そこに行ってたね。そこで今日の対局は誰対誰みたいにずらっと並んでいるんだけど、プロ棋士の対局記録係の募集があって。有名な人だと東京から来た加藤一二三（ひふみん）なんかも記録したね。当時**3**級だったかな。ただ問題なのは、記録を最後将棋連盟に渡さんといけんわけ。なんだけど対局者も反省するために記録を欲しがるわけよ。で、私も勉強のために欲しいと。だから**4**枚必要なんだけど、当時コピー機がなかったから、記録の時は必ず**4**枚全部書くようにしてたね」
すぐに盤面が動く時とかあるじゃないですか。そういう時はどうしてたんですか？
「そん時は**1**枚だけ書いて、後で長考の時に書き写す感じ。それともう一つ問題なのが持ち時間が各**6**時間あって。足は痺れたら崩せるんだけど、トイレは行かないわけにいかんじゃん。どうするかというと、持ち時間に余裕がある方に（よろしいでしょうか）と聞いて、いいと言われたらすぐ行くと。行っている間その手番の人は気を遣って指さないでいてくれるわけよね。それでまあ終わるのが深夜の**1**時とか。どちらも命懸けとるから持ち時間をフルに使うからね。でもまだ終わりじゃないのよ」
まだ終わらないんですか？
「感想戦よ！あーでもないこーでもないと永遠に続くわけよ。でも当時はそれが楽しくて仕方なかった。プロ棋士の感想戦に付きっきりで居れるわけだから。その長い感想戦が終わった後、駒と盤を磨いて片付けてようやく終わりと」

(5)当時を振り返って

本当に極限の生活ですね…つらくはなかったんですか？
「それはないよ。嬉しくて楽しくて。全部感謝だよね。(その歳で行っても絶対にものにならんからやめとけ)といろんな人に言われてきた。それを押し切ってやってきたわけだから。ここで行かなかったら一生悔いが残ると思ってるから。自分で選んだ道だから後悔するわけがない。辛いとか思ったことは一回もないね」

4.議員秘書時代

1　　(1)

奨励会を退会した後、アルバイトをしながら社会を経験した谷本氏。1987年、東京に出て、中川秀直衆議院議員の秘書になった。
なんで国会議員の秘書になったんですか？
「それは、政治を目指そうと思ってたから。これまでは将棋で人生の奥義を掴もうと思ってたけど出来なくて。で当時田中角栄が失脚した**ロッキード事件**があって。その時お笑いで(ピーナッツを受け取ってください)とか言ってたの。賄賂のことなんだけどもその時はなんのことだかわかんなくて。大人として社会の仕組みがわからないと恥ずかしいと思って、それで政治の勉強をするために秘書になったね」

中川秀直氏…広島県選出(呉を含む選挙区)。森喜朗内閣で官房長官、自民党の幹事長、政調会長など要職を歴任。2012 年引退。

(2)東京で働く秘書として

秘書をしていたのは広島の選挙区出身の中川議員のところですが、同郷っていうのは選ばれる要因として大きいんですか？
「そうだね」
それは親近感が湧くみたいなことなんでしょうか？
「いやいやそうじゃなくて、私が中川さんの秘書になったら、私の親戚とか友人は大体中川さんに投票するでしょ？」
あ、票集めのため？
「当然そうよ。私面接の時に高校しか出てないけど大丈夫かって聞いたけど、そんなのはどうでもいいと。やる気さえあって車の運転ができればそれでいいって言われたから」
秘書としての仕事
自民党の部会への代理出席
陳情団の対応
党費の回収とパーティー券の販売
手紙の返事の代筆

料亭の調整や予約
車で送迎など
「自民党では部会というのがあって、外交とか福祉とか国防とかいろんなのがあるんだけど、大体朝8時くらいから始まるのよ。そこに秘書が大体2人行って、手分けして1人4つの部会を掛け持ちして出席するような感じだったね。議員が早起きして行けばいいんだけど」
こういうのは秘書が行く感じなんですか？
「いやいや、本人が行くところもいっぱいあったよ。でもうちはほとんど秘書が行きよった。それで持って帰って来た資料をファイリングすると」
「地元から陳情団が来る。それを国会議事堂に案内するのも秘書の仕事だったね。ただ問題があって、議事堂に入るには必ず人数分通行証がいるの。なんだけど連絡もなしに来るから用意してないわけよね。でどうしたかというと、他の秘書が走り回っていろんな議員のところから通行証を借りてくるのよ」
それってOKなんですか？(笑)
「そんなのはみんなやりよるよ(笑)。通行証があればいいんだから。それで全部案内し終わって正門前に来る。そこに代議士が登場するという日程を組んどった」
満を持して。
「そう。満を持して。(さすが先生だ！)と相手方が感激したところで写真を撮って送る。こういう細々した仕事はみんな秘書がやりよった。それとかあとは手紙が来るでしょ。その返事も全部秘書が代筆しよったね」
まあ書くわけないですよねえ(笑)
「書くわけないよ忙しいのに(笑)。当時はワープロがなかったから全部手書きで。まあそれも修行だと思って感謝してる。恨みに思ったことなんか一度もないよ」
「あとはあそこら辺の界隈には料亭政治というのがあってね。ほぼ毎晩赤坂とか銀座の料亭で密談がされるわけですよ。それの調整とかもやったね。でうちは秘書が送迎もやっとったんだけど他のとこは別に運転手がいて。私は送ったら事務所に戻って仕事しよったけど、その人たちは近くでずっと待機するの。その時に料亭から(お車代です)ということで小遣いが出とったね。それで大体(10時ぐらいに来て)と言われるんだけど10時に出てこんわけよね」
延長して。
「そうよ。12 時とかまでかかりよったねえ。まあそういう時は待つしかないからしょうがなかったけど。その後で議員を宿舎まで送り届ける。で、まあ夜は長いし、休みがないしで

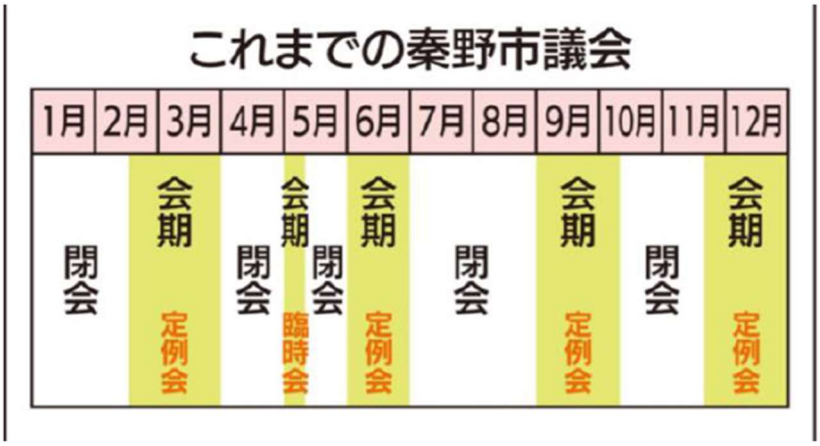
いわゆる時間外労働という概念がまったくなかったのよ。残業代みたいなのは基本どの代議士も出してなかった。ただ、(お車代で勘弁して)というのが暗黙の了解だった。そんな大した金額じゃないんだけども(笑)」
あとは政治資金パーティーの券を売るのも秘書の仕事だったり？
「そうよ。議員が売るわけないんだから(笑)。みんな秘書ですよ」
どのくらい来るもんなんですか？
「来やせんよ。こっちが売りに行くの。大企業だったら2万円のパーティー券を10枚とか、ちっちゃいとこなら2枚とか、1枚でもいいから買ってくれと回るわけよ。後は個人の人、年金生活者の方とかは2万円はきつい。だから別で1万円の券を作って売りに行く。秘書はノルマを与えられてこれをクリアしろと来るわけよ。あとは党費の回収とか勧誘もせんにゃいけん。それを集めて出さんと自民党から睨まれるわけよ。それで党員の人には更新の書類を書いてもらって、1年で4000円だったと思うけども。それも秘書同士で競わせるわけ」
そこで結果を出したら公設秘書とかにしてもらえるみたいな感じですか？
「そんなことはあり得んかったの。親族で固められてるから。大体どこの議員も第一公設秘書は自分の子供がやってるよね。その子供はそこで実績を積んで将来父親の跡を継ぐということ。もう辞めたけどこの前の岸田首相の息子みたいな感じで。だからいくら頑張ったとしても公設秘書にはなれんわけよ」
公設秘書…給料が国から支払われる国家公務員。国会議員は3人までつけることができる。
それ以外の秘書を私設秘書というが、給料には3倍以上の差があったという。

(3)地方で働く秘書

呉市議選に出馬することにした谷本氏は、国会で働く秘書から地元の選挙区で働く秘書になった。
「国会議員は国会がない時は大体金曜日に地元に帰って、火曜日に東京に戻ってくる感じ。で地元の秘書も大変で、議員が帰って来る時はいつも地元で国政報告会というのをやるの。これは地盤培養行為と言って、やっとかないと次の選挙で落ちるから。それで地元の秘書が人集めをする。だから土日の休みはない。あと選挙区が広かったから、この週は集中的に東広島で報告会をしようという感じで秘書が集まって決めよった」
持ち回りで。
「そう。だからここには西条の担当の秘書が(日程を入れてくれ)と」
地区ごとに担当がいるんですね。
「たくさんおったよ。で次の週は呉でやろうとか、どんどん降りて来るわけよ。それをこの日しか議員がおらんからとどうしてもお願いしますと世話人に頼み込む。こういう根回し、

動員とか会場を押さえたりとか、秘書がみんな歩き回って」
きついですね…
「きついよ。東京で働いとる時よりも体力的にはきつい」
秘書をたくさん雇っとったらだいぶお金がかかるんじゃないですか？
「そうね。地元の事務所とか。うちの場合は東京に、議員会館以外にも事務所があったりしたし。私設秘書の給料も出さんといけんからお金はいくらあっても足りんかったね。だから秘書の給料の流用疑惑なんかが前に社民党なんかであったりした」
「秘書はあくまでも通過地点だった。政治家を目指すためになったからね」

5市議会議員



上の図のように市議会は3、6、9、12月に定例会(約2週間～1ヶ月)がある。
定例会毎に、招集2週間前から委員会が開かれる。
たまに臨時会(約1日)がある。

(1)当選

谷本氏は、1995年、38歳で呉の市議選に初出馬して当選した。当時の投票率は66%、今は48%
「今度は自分が政治を変えてやろうと思った」
市議から県議、県議から国会議員とどんどん鞍替えしていく人がいるじゃないですか。
「うん。いっぱいおるね」
それは目指さなかったんですか？
「今でもチャンスがあれば国会議員になろうと思っとるよ。秘書になった時からずっと、国を変えてやろうと思ってる。市議会議員は暫定的に選んだ道だから、市議会議員で終わろう

とは最初から思ってないよ」

(2)議員の仕事

ルーティン

7:00　起床
　　家で仕事　週に1度街頭演説
10:00　議会(ほとんど午前中で終わり)
午後　陳情の処理や質問の準備

(3)今の議会について

どれか1つの委員会に議員は必ず所属して活動する。逆に言えば、どれか1つに所属していれば、他のところには出る必要はないのだが、谷本氏は全ての委員会に出席し、必ず質問する。また、定例会では必ず一般質問をする。執行部の独断を許さないためだという。
「委員会に出席すると、執行部の方が議案について説明する。それについて質疑応答があるんだけど、質疑が出ない場合がある。その時は委員外議員も質疑ができるんだけど、私はそれに必ず手を挙げる。そうすると”ひんしゅく”を買うの」
なんで自分たちはしてないのに部外者がするのかと。
「そう。たまに(谷本さんに委員外でやられると困る)という意味の分からんことを言われたりもする。この前はある議員が(今日は質問するんですか？)と言ってきたからたくさんしますよと返したら、とても残念そうな表情をして去っていったの。後から知ったんだけど、その人は3時から予定があったらしい。だからそれまでに終わらないといけないんだけど私がたくさん質問するから間に合わんということで」
いやいや…
「おかしな話よ。予定を入れてるのがおかしいんだから」
「これまでで1番ひどかったのは2014年の12月の民生委員会。結構長くて5時間ぐらいあったんだけど、質問したのは7人のうち私だけだった」
え？そんなことありますか(笑)？
(本当でした。ちなみに谷本議員(当時)の総質問数はなんと 97 回！)下のリンクは議事録

https://ssp.kaigiroku.net/tenant/kure/MinuteView.html?council_id=524&schedule_id=1&minute_id=511&tab=twin#
「こんなのはしょっちゅうだった。これが今の議会の実態です(笑)」

(4)今後

「本当は議会で変えないといけないところはまだまだあるんだけど、今私は市議では無くなったから。ある程度のことはしたということで次は国政に出て行こうと思ってる。
本当にひどいいじめがいっぱいあるの。私はベテラン議員の側に入るからこれでもいじめられにくい方なんだけど。この前も質問する議員が少ないって自分の広報誌やSNSで言った人が問責決議案を出されたりしてたから。こういうことを変えていかんといけんと思ってる」

6インタビューを終えて

今回のインタビューは僕と谷本氏の将棋という繋がりから始まった。僕と谷本氏が将棋に興味を持っていなかったら、このインタビューはなかった。昔始めたことが、意外なところで活きてくるんだなあと思う。
このインタビューで1番心に残ったのは、奨励会時代の極限の生活や、議員秘書の過酷な仕事を感謝してる。恨みに思ったことはない。と断言していたこと。僕は1度やると決めたことでも、すぐに弱音を吐いてしまうタイプなので、谷本氏のやると決めたらとことんやり続ける意志の強さ、ストイックさは本当にすごいと思うし、憧れるところだ。
また、最後の議会のいじめの件では、安芸高田市の石丸市長と議会の対立にも通ずるところがあると思う。議会はどんどん新しく変わっていくべきだと思うのだが、普通、こういった地方議会の事柄はあまりニュースにならない。今回のことで、少しずつ変わっていくことを願う。
お忙しい中快くインタビューを受けて下さった谷本誠一氏に感謝申し上げる。
谷本氏のHP
https://tanimoto.shizen-kyosei.jp
写真
https://www.townnews.co.jp/0610/2022/01/14/608505.html
https://www.netdenjd.com/articles/-/63110